

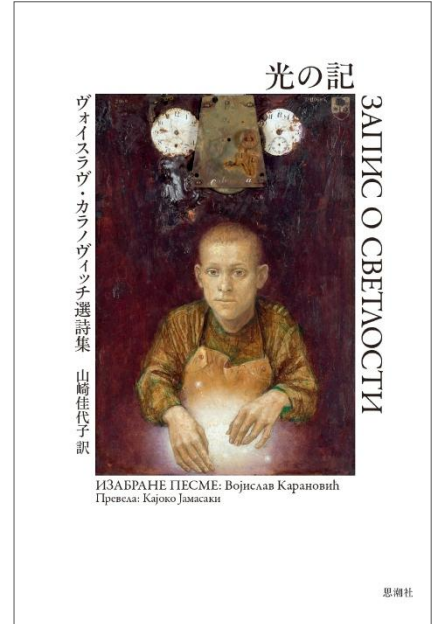
見えない天使たち

ヴォイスラヴ・カラノヴィッチ詩集『光の記』をめぐって

後半は、セルビア正教会の修道女マリア・アンティッチが描く聖画をとりあげ、そこに描かれる天使について語る。修道女マリアは、ヤセノバツ強制収容所で大量虐殺の犠牲となった人々、とくに子供たちを記憶して聖画を描いている。第二次世界大戦時に、ナチス・ドイツの傀儡国家だったクロアチア独立国が設営、セルビア人、ユダヤ人、ロマ人が犠牲となった。カラノヴィッチは、ユーゴスラビア内戦、国家解体という激動の時代を背景に創作を始めた。20世紀の悲劇をどう記憶するのか。さらに戦火が広がる21世紀とどう向かい合うのか。詩人の言葉に、イコン画家の聖画に描かれた天使のささやきを、セルビアからお贈りする。

今秋、セルビア現代詩を代表するヴォイスラヴ・カラノヴィッチ翻訳詩集『光の記』(山崎佳代子訳)が刊行された。カラノヴィッチの詩の世界は、存在と非存在、見えるものと見えないものの接点に光をあてて、移ろいゆくもの、過ぎ去るものを、静かに歌い上げる。詩作品を朗読し、セルビアの現代詩人が織り上げる「無」のイメージを味わっていただく。カラノヴィッチの詩群には、天使を歌ったものがあり、そこから立ち上がるものをお届けする。

講師：山崎佳代子さんからのメッセージ



ヴォイスラヴ・カラノヴィッチ選集 山崎佳代子訳『光の記』思潮社 2026年

講師：山崎佳代子 / 2026年 11月15日(日) 14:00～15:30



会場： 豊平館 1階・下の広間

北海道立文学館講堂ではありません

札幌市中央区中島公園1番20号

聴講無料

講師略歴

山崎佳代子(やまさき・かよこ) 詩人、翻訳家

1956年生まれ、静岡市に育つ。北海道大学卒業(露文科)。1979年、ユーゴスラビアに留学(サラエボ大学文学部)。元ベオグラード大学文学部教授(日本学)。詩集に『海にいったらいい』(思潮社)、『黙然をりて』(書肆山田)など。翻訳書にダニロ・キシウ『若き日の哀しみ』(東京創元社)など。エッセイ集に『ベオグラード日誌』(書肆山田、読売文学賞、2014)、『パンと野いちご』(勁草書房、紫式部文学賞、2018)など。

*要電話申し込み 011-511-7655 (北海道立文学館) *受付開始:10月15日(木)9:00～ *先着順、定員30名

北海道立文学館

〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番4号
TEL: 011-511-7655 <https://www.h-bungaku.or.jp>

*11月27日(金)まで、施設
改修工事のため休館中です。